



23 急性心筋梗塞患者の退院時のアスピリンかつ・またはチエノピリジンの処方率

解説	<p>急性心筋梗塞に対する重要な治療として、急性期からの抗血小板薬の使用は確立されている。当院を含め、多くの他施設のクリニカルインディケーターとして、「急性心筋梗塞患者の退院時のアスピリン処方率」が採用されている。現在でも、アスピリンは急性心筋梗塞に対する抗血小板薬の第一選択であるが、アレルギー反応、消化管出血、喘息発作誘発などの副作用のため、アスピリン不耐用の状況となる患者も存在する。このような患者に対してはクロピドグレルないしプラスグレルといったチエノピリジンによる抗血小板療法が推奨されている。これら2剤の退院時の使用率を指標とすることで、急性心筋梗塞に対し標準的な治療が行われていることを示すことができると考える。</p>												
実績	<table border="1"><thead><tr><th>年度</th><th>処方率 (%)</th></tr></thead><tbody><tr><td>平成25年度</td><td>100</td></tr><tr><td>平成26年度</td><td>100</td></tr><tr><td>平成27年度</td><td>100</td></tr><tr><td>平成28年度</td><td>100</td></tr><tr><td>平成29年度</td><td>100</td></tr></tbody></table>	年度	処方率 (%)	平成25年度	100	平成26年度	100	平成27年度	100	平成28年度	100	平成29年度	100
年度	処方率 (%)												
平成25年度	100												
平成26年度	100												
平成27年度	100												
平成28年度	100												
平成29年度	100												
定義	<p>急性心筋梗塞が主病名で入院した患者のうち、バイアスピリンかつ・またはチエノピリジンが退院時処方に含まれる患者の割合。</p>												

※本院独自の指標